

## 運営に関わって

## 朝倉 清高

北海道大学触媒科学研究所  
所長

あさくら・きよたか／経歴

2015年10月 - 現在 北海道大学触媒科学研究所 所長  
 2014年4月 - 2015年9月 北海道大学 触媒化学研究センター センター長  
 1999年4月 - 現在 北海道大学 触媒化学研究センター 教授  
 1994年5月 - 1999年3月 東京大学理学部スペクトル化学研究センター 助教授  
 1992年10月 - 1994年5月 東京大学理学部化学教室 講師  
 1993年3月 - 1994年4月 フリッツハーバ研究所 アレクサンダー・ホンフンボルト奨学生  
 1984年9月 - 1992年9月 東京大学理学部化学 助手  
 委員歴  
 2015年5月 - 現在 日本表面科学会 副会長  
 2015年4月 - 現在 表面科学会東北北海道支部 支部長



2012～2015年 運営委員を務めました。分子科学研究所には、学生時代からお世話になってきました。化学分野における大学共同研究の拠点として、日本の学術を支えてこられている分子科学研究所の運営に少しでも関わることができ、様々なことを学ぶことができました。ありがとうございます。

現在、小生は北海道大学触媒科学研究所（旧触媒化学研究センター）で所長をやっておりますが、触媒科学研究所は、分子科学研究所同様、全国の大学の共同利用・共同研究拠点として触媒分野で活動しています。両者は、内部昇格の禁止、完全公募など多くの類似した人事制度を持っています。触媒科学研究所は、1943年に創設された触媒研究所にその起源があります。その後のいろいろな事情から1989年に触媒化学研究センターとして再出発することになりましたが、その際に故井口洋夫先生をはじめとして多くの先生方にお世話になりました。その運営や人事は分子科学研究所を1つの模範としたと聞いております。今回の運営委員として、多くのことを学び、研究所の運営にも生かせればと思っております。

さて、お引き受けする直前まで、高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所の運営会議委員をしていただきました。同じ大学共同利用機関ですので、人事・共同利用など共通点は多く、両者とも如何にしてコミュニティからのニーズや意見を吸い上げるかに腐心されていると感じました。しかし、両

者の運営委員会の雰囲気は随分と違った印象を持ちました。一つに、会議が、紙媒体（分子研）か電子媒体（物構研）かということにあったように思います。重いファイルに綴じられた紙媒体は、スマートにインターネットにつながり、次々と資料が現れる電子媒体より、前近代的で非効率に見えます。いずれは、分子研も電子媒体のペーパーレス化することでしょう。しかし、この両者を比べ、委員の“参加する”心持はずいぶんとちがったように思います。紙媒体がどっしりと机上にあるときと、資料がスクリーン上に映写されるときとで、前者の方が参加形態が能動的に思えるのです。ぱらぱら読みや紙に直接書き込み、紙をばらして重ねることもできるなど考えるためのアクションがとれます。映像はきれいですし、鮮明ですが、どうしても受動的になってしまうように思えます。テレビが普及してもなかなか新聞がなくなるのにも似ていて、考えて能動的に意見を言うには、紙媒体の方が良いように思えます。おそらく、そういうことを言うこと自身、古い人間なのかもしれません。電子教科書が普及し、それに育てられた若人が現れる40年後には、必然的に電子媒体で議論するのが当たり前になり、人間も進化しているものだと思いますが、それだけではない面もあるように思いますので、電子化されるときに参考にしていただければと思います。

さて、運営委員会で今も思い出さ

れる議論の1つは、女性研究者増加についてです。分子研でもいろんな方策で、増やそうとされていますが、本質的な問題は博士課程の女性研究者が少ないことにあるというご意見がありました。これは大学人の責任として今も心に強く残っています。女性の人たちにも理工系に飛び込んできてもらえる環境を整えないといけないのだと思います。“りけじょ”という言葉がありますが、なんか特別な人たちのように一般の人たちに思われているのかもしれないといけないということだと思います。

最後に 分子科学研究所に望むことは、大学共同利用機関として、大学に所属する共同利用・共同研究拠点のリーダーとしての役割を積極的に果たしていただくことと思います。大学が法人化され、12年がたちますが、2004年を境に日本の研究力が下がっていることは、統計が示しているところであり、個人間の競争・大学間の競争が激化しています。適度で公平な競争は人々の活動に活力を与えるという良い面もありますが、過度な競争は、無駄な消耗戦を行い、ゆとりと人間らしさを奪い、真の活力や創造性を失わせる面もあります。共同利用・共同研究の本質は、仲間内の無駄な競争でなく、互いに知恵と力を合わせて、新しいものをともに作る共創であることだと思います。今、日本は未曾有の財政難に陥っています。ここで、少ないパイを

力づくでとりあい、1%の勝ち組を作って、99%の人たちがのたれ死ぬような愚はやめて、大多数の人たちの力を合わせ、全国の大学がともに助け合い、新しい学術を共創し、社会のイノベー

ションへとつなげる努力こそが必要と思います。そのための大学間をつなげる役割が共同利用・共同研究拠点活動であり、その中核である分子科学研究所をはじめとする自然科学研究機構や

高エネルギー加速器研究機構などの共同利用法人が先頭に立って、新しい日本の科学技術を協奏・共創していただければと思います。4年間本当にありがとうございました。

## 運営に関わって

### 寺 亨

九州大学大学院理学研究院・教授

てらさき・あきら / 1992年東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士課程修了。分子会合体のフェムト秒レーザー分光に従事。同年、東京大学理学部助手。1997年豊田工業大学受託客員助手（常勤）、1998年同助教授、2006年同教授。質量分析法とレーザー分光に基づき、原子分子クラスターの物性・反応性を研究。2010年より現職。放射光によるX線分光も実験手段に加え、金属クラスターの電子状態、磁性、光学特性など基礎物性研究を推進中。



2012年4月から4年間、運営会議委員の一人に加えていただきました。九州大学に赴任してまだ1年ほどの時期で、学内の事さえままならない状況のときでした。当時の所長・大峯巖先生から電話を頂き、人事選考部会委員までを依頼されたときには、正直なところ、大変なことになったと直感しました。一方で、学外の組織の運営に関することはなかなかできない経験ですので、貴重な機会を頂いたとの思いも持ちました。

就任当時、それまでの分子研との関わりを振り返って見たときに、多くの外部委員が過去に何らかの形で分子研に在籍されていたのに対して、自分自身は所属経験がありませんでしたので、純粹に外部の立場でした。ただ、大学院で研究の世界に入って以降、長倉研ご出身の小林孝嘉先生、井口研でいらした近藤保先生に長年にわたってお世話になっていましたので、分子研をずっと身近に感じていました。

実際に運営の場を覗くと、比較的小規模な組織のメリットを生かして機動力を発揮した運営で、所長の主導のもと、新しいセンターの設立や若手人材の登用システムなど先端的な企画を打ち出して、何か大胆な展開を予期させる雰囲気を感じました。世の中の情勢に応じて素早く

行動を起こすこの機動力が、分子研の活力の源になっているのだと思います。大学共同利用機関としては、所内の方々が国内の多くの研究者と連携関係を築く努力をされ、外部機関との協力研究を数多く実施しており、その役割を十分に果たしていると思いました。申請された課題を可能な限り採択して応じる姿勢を是非とも継続して、分子科学分野の発展に広く貢献を続けていただきたいと思います。また、外部委員を加えた運営であるがために公正さが保たれ、求心力を強く維持しているのだと感じました。これは継続すべき運営スタイルだと思います。

外部との接点のもう一つに、研究会開催の公募があります。運営に携わった折角の機会を利用して、自分自身でも分子研研究会を一度開催させていただきました。他の国際会議支援事業との共催という変則的な形をお認めくださり、柔軟な考え方で対応してくださいました。そのお蔭で、もともと二国間の企画だった会議を多国間に拡張することができて充実した討論となった上に、幸い所内からの参加者にも好評を頂き、大変有難く思いました。ただ、一つ申し訳なく感じたのが、所内対応を引き受けてくださった先生に、会場のアレンジから予算の管理・執行まで、

多大なご負担をかけることになったことでした。ここでは、外部の主催者が直接対応できる部分を増やすなど、所内の負担を軽減する改善策が検討されても良いのではないかと思います。

人事の面では、新陳代謝の早さに驚かされました。これは、所内の方々が大きな成果を上げて次々と栄転されてゆくからにはかならず、分子研のアクティビティの高さを示す象徴的な一面です。この勢いを是非とも保っていただきたいと思います。内部昇進を認めていないことや、若手独立フェローなどの取り組みのもとに、分子研で育った研究者が全国に散らばって国内全体を盛り上げてゆく、そのような人材流動の拠点となる展開が望ましいと思います。

分子研の運営に携わった経験が今後の自分に大きくプラスになることは間違いなく、この貴重な機会を頂いたことに感謝いたします。今後、新しく就任された所長・川合眞紀先生のもとで、日本ばかりでなく世界の分子科学研究を牽引する中核組織として、さらに大胆なプロジェクトにも挑戦して、ますます発展を遂げることを期待します。自分自身も将来にわたって分子研にお世話になることと思います。今後ともどうぞよろしく願いいたします。